

⑥ 海棲哺乳類を指標種とした重要地域（沿岸域・海洋域・島嶼地域）

沿岸域・海洋域・島嶼地域を対象とした指標種として海棲哺乳類(トド、ゼニガタアザラシ(北海道)、スナメリ(本州～九州)、ジュゴン(南西諸島)及びザトウクジラ(南西諸島、小笠原諸島・火山列島))に注目した。

トド(北海道)

トドは、海洋生態系の上位に位置する大型の海棲哺乳類である。日本に繁殖場はない。わが国(北海道)に来遊するトドは、千島列島及びオホーツク海沿岸の繁殖場から来遊する群と考えられており、冬季11月～5月に来遊する。日本近海に来遊するトドの個体数は、近年、激減している。

トドの近年の主な上陸場とシーズン最大観察数は表7の通りである。

表7 北海道周辺における現在のトドの主な上陸場とシーズン最大観察数

主な上陸場	シーズン最大観察数	
	平成16年度	平成17年度
稚内弁天島	75頭(3月)	120頭(2月上旬)
利尻島鬼脇	16頭(3月中旬)	- (調査なし)
雄冬上陸場	212頭(2月中旬)	209頭(2月下旬)
浜益区送毛付近	29頭(3月中旬)	- (調査なし)
神威岬	25頭(2月中旬)	30頭(12月下旬)
奥尻島室津島	調査は行っていないが、通常5頭程度上陸	

※シーズン最大観察数には概数も含まれる。

出典：水産総合研究センター北海道区水産研究所提供資料(平成16年度及び平成17年度水産庁委託事業「国際資源調査等推進対策事業」の一環としてトドの資源調査を実施)

トドの回遊ルートについては、図29、30の情報がある。

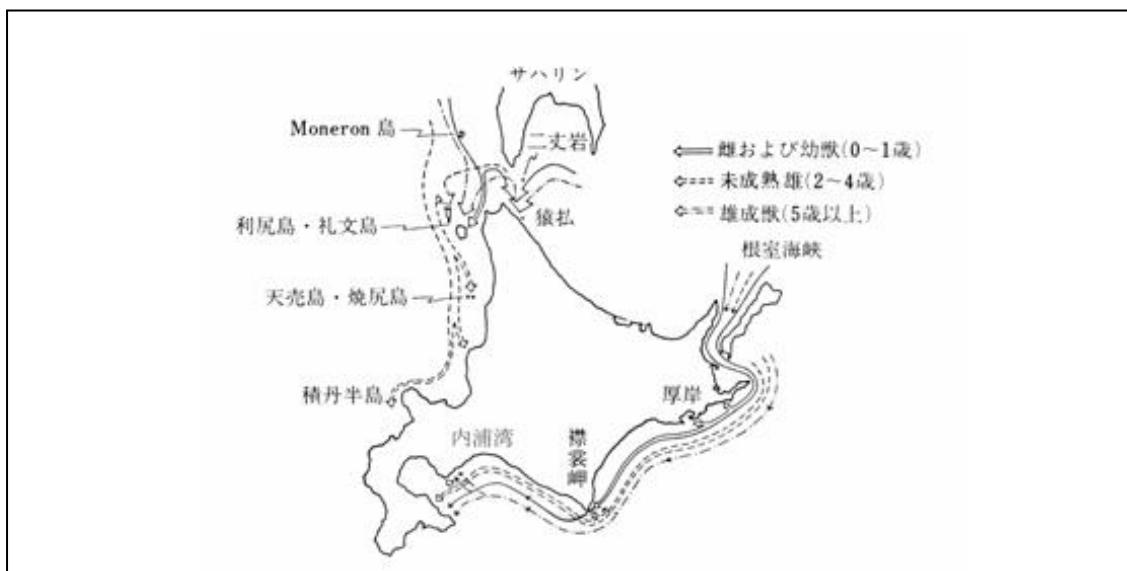


図29 1980年代の回遊模式図

出典：山中正実・大泰司紀之・伊藤徹魯(1986):北海道沿岸におけるトドの来遊状況と漁業被害について. In 和田一雄・伊藤徹魯・新妻昭夫・羽山伸一・鈴木正嗣(編)「ゼニガタアザラシの生態と保護」(東海大学出版会)及び水産総合研究センター資料(<http://kokushi.job'affrc.go.jp/>)「トド 北太平洋沿岸・オホーツク海・ベーリング海」

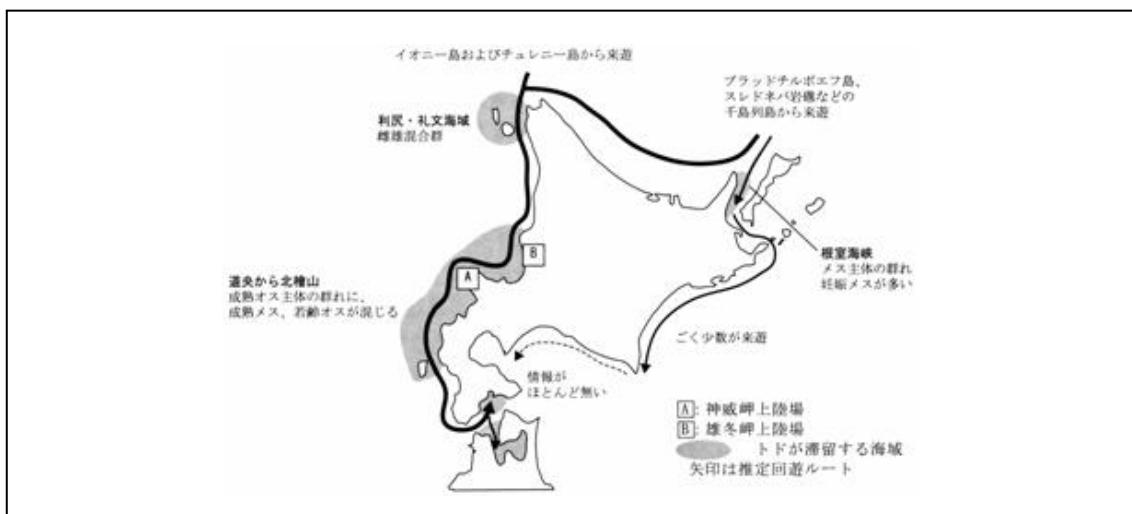


図 30 近年の来遊状況と回遊模式図

出典：星野広志(2004)：トドの来遊状況. In 小林万里・磯野岳臣・服部薰(編)「北海道の海生哺乳類管理」(北の海の動物センター)及び水産総合研究センター資料(<http://kokushishi.job.affrc.go.jp/>)「トド 北太平洋沿岸・オホーツク海・ベーリング海」

表7、図29、30をもとに、現在のトドの重要な上陸場として表7中の6地域、現在の回遊ルートとして、トドの繁殖場である千島列島・オホーツク海沿岸地域と北海道沿岸地域との間を結ぶルートを、図36に示した。

ゼニガタアザラシ(北海道)

ゼニガタアザラシも、トド同様、海洋生態系の上位に位置する大型の海棲哺乳類である。また、日本の陸地で繁殖する唯一の鰐脚類であるが、生息環境の悪化により、生息数は少ない。ゼニガタアザラシの近年の主な上陸場、個体数調査結果は図31、表8の通りである。

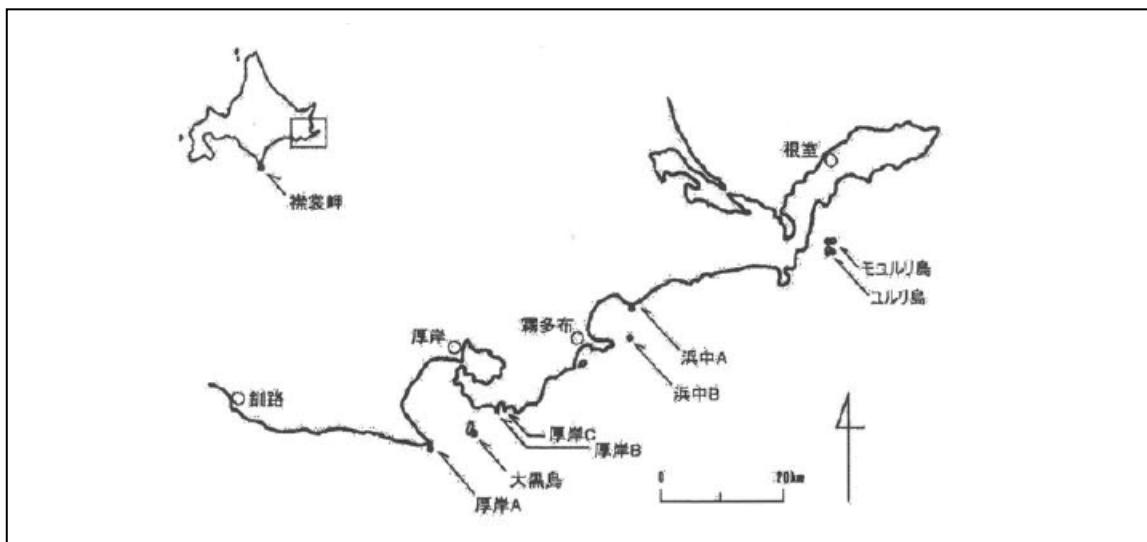


図 31 ゼニガタアザラシの上陸場

出典：「第6回自然環境保全基礎調査 海域自然環境保全基礎調査 海棲動物調査(鰐脚類及びラッコ生息調査)報告書」(環境省自然環境局生物多様性センター、2002年3月)

表8 ゼニガタアザラシ個体数調査結果(2000年、2001年)

	2000年			2001年				
	繁殖期		喚毛期	秋期	繁殖期		秋期	
上陸場	一歳以上	パップ			一歳以上	パップ		
モユルリ島	17	3	23	-	32	4	6	-
ユルリ島	7	2	3	-	6	4	4	-
浜中A	13	2	77	138	7	2	89	121
浜中B	調査できず		調査で きず	8	100±	20±	20-25	17
大黒島	134	46	435	-	165	53	169	-
厚岸A	6	2	46	-	4	3	50	33
厚岸B	40	14	3	-	31	7	1	1
厚岸C	—		32	-	8	5	7	10
襟裳岬	254	17	344	-	257	29	241	-
合計	471	86	663		610±	127±	660-665	

※「パップ」とは当年生まれの新生子を指す。

出典: 「第6回自然環境保全基礎調査 海域自然環境保全基礎調査 海棲動物調査(鰐脚類及びラッコ生息調査)報告書」(環境省自然環境局生物多様性センター、2002年3月)

ゼニガタアザラシの分布域は根室半島から襟裳岬までの東部太平洋岸で、1940年頃には多くの上陸場が存在していたと考えられているが、現在では、上陸場が減少している。断続的にしか利用されない不安定な状態にある上陸場が少なくなく、安定した上陸岩礁は襟裳岬と大黒島のみである。それと関連して襟裳岬と大黒島への集中化が顕著である。季節的な移動などが明らかにされていないため、利用する海域の範囲は不明だが、上陸場からそう遠くない沿岸域を利用するものと考えられている。

図31、表8にもとづき、ゼニガタアザラシの重要な上陸場(岩礁・島嶼)として、図31、表8中の9か所を、図36に示した。

スナメリ(本州～九州)

スナメリは、ハクジラ類の一種で、ペルシャ湾から日本にかけての熱帯・温帯アジアのごく沿岸海域に分布している。中国には、揚子江に周年分布する淡水性の系群がいるが、わが国には淡水域に定住するものはいない。壱岐・対馬で発見情報は得られていないことから、わが国と韓国との間で個体の交流はないものと考えられている。日本において本種は、仙台湾～東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海～響灘、大村湾、有明海・橘湾の5海域に主に分布し、その他の海域への出現は稀であることが知られている。日本における主分布域は図32の通りである(水産庁・水産総合研究センター(2008):平成19年度国際漁業資源の現況・スナメリ)。

沿岸の水深50m以浅域の発達した遠浅で砂泥質の卓越する地域を生息域としており、魚類、エビ、イカ、タコ等を捕食し、沿岸生態系の最上位に位置する海棲哺乳類として、沿岸生態系の健全性を示す指標種といえる。

水産庁編「日本の希少な野生水産生物に関するデータブック」(2000年)では、「それぞれ

の生息海域で社会開発が著しく、海面の利用が盛んに行われ、海上交通が激しく、光、音、化学物質、ごみなどの公害の度合いが著しく、環境の悪化が彼らの生存に大きな脅威を与えている上に、沿岸漁業による混獲の危険があり、昔に比べて減少している地域個体群が多いと考えられる。」とされている。

伊勢湾・三河湾のスナメリについて、同海域では、冬季から春季に伊勢湾湾口部及び三河湾湾口部において産卵する、スナメリの重要な餌生物であるイカナゴを目的として来遊する可能性を示す調査が、近年行われているが(田口美緒子・吉岡基・柏木正章(2007):三河湾湾口部におけるスナメリの分布密度の季節変化, 哺乳類科学 47(1)2007)、各地のスナメリの詳細な分布状況、その変化、回遊生態については、まだ十分に明らかとなっていない。

瀬戸内海では海砂の採取による生息域の分断化の可能性が指摘されている。スナメリの分布を制限する要因は明らかでないが、地形的特徴が関わっている可能性が高く、海砂の過度の採取などが、生息域の縮小や分断を招くおそれがあるとされている(水産庁・水産総合研究センター(2008):平成 19 年度国際漁業資源の現況・スナメリ)。

図 32 にもとづき、スナメリの主分布域と考えられている海域を全て図 36 に示した。



図 32 日本におけるスナメリの主分布域

出典 : Shirakihara, K., H. Yoshida, M. Shirakihara and A. Takemura. 1992. A questionnaire survey on the distribution of the finless porpoise, *Neophocaena phocaenoides*, in Japanese waters. Mar. Mamm. Sci., 8: 160-164. 水産庁・水産総合研究センター(2008):平成 19 年度国際漁業資源の現況・スナメリ

ジュゴン(南西諸島)

ジュゴンは浅海域で海草を採食する海棲哺乳類である。分布は広く、インド洋西岸(アフリカ東海岸)から東は中央太平洋のバヌアツまでの北緯30度から南緯30度の範囲の浅海域を中心に生息している。日本に生息するジュゴンは、その東アジアにおける分布の北限とされている。黒潮が流れる島々の周囲のサンゴ礁の内側は波が静かで礁池が広がり、ジュゴンの餌資源である海草が繁茂している。

現在のジュゴンの分布域は、概ね沖縄本島周辺に限られ、個体数については50頭を超えることはないと考えられている。沖縄本島周辺海域におけるジュゴンの目視地点と食跡の分布状況(1965~2006年)は図33の通りである。

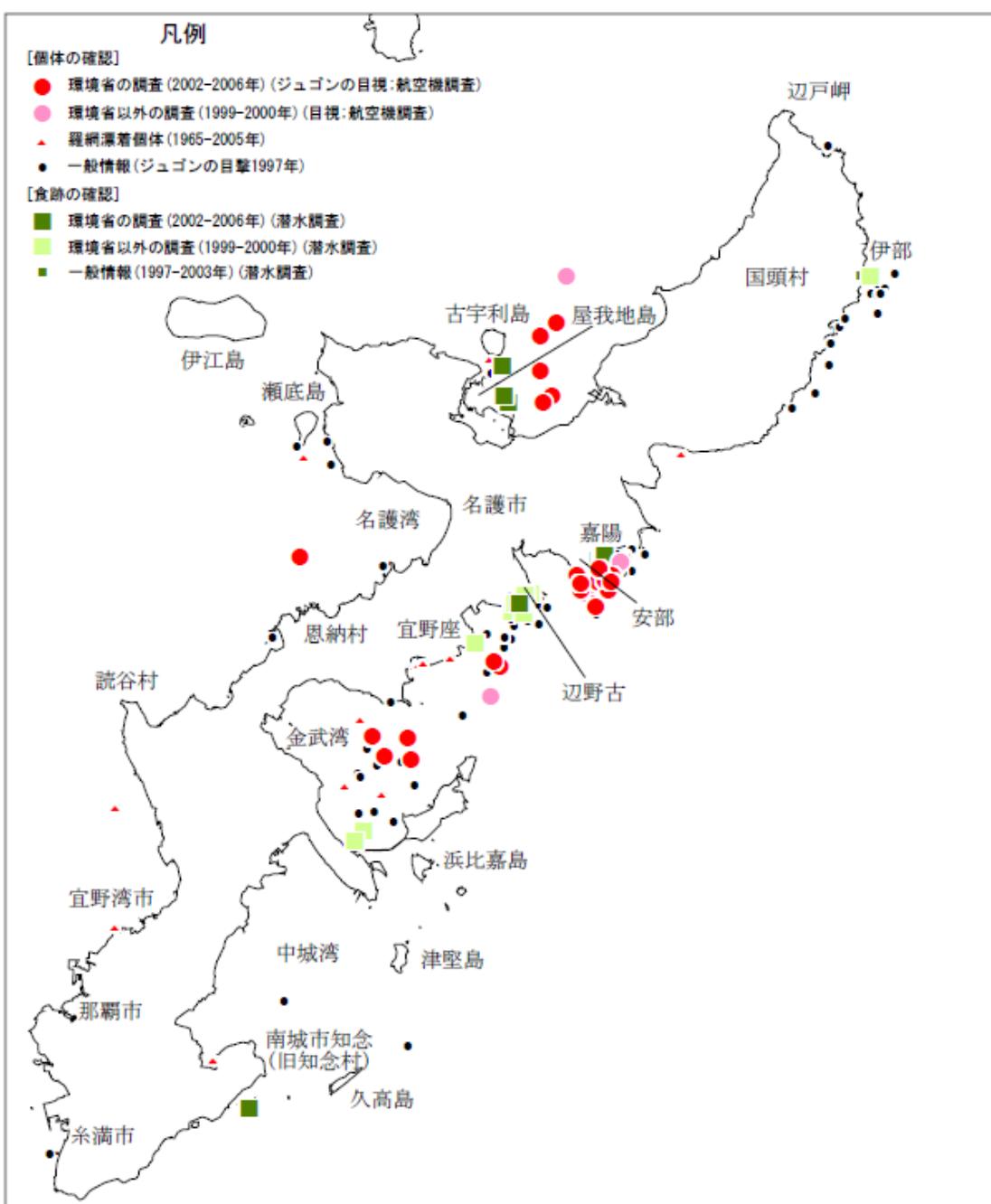


図33 沖縄本島周辺海域におけるジュゴンの目視地点と食跡の分布状況(1965~2006年)

出典: 環境省「ジュゴンと藻場の広域的調査 平成13~17年度 結果概要」(2006年)

環境省(2006年)の遺伝子解析において、沖縄近海に生息する個体とフィリピン近海に生息する個体は、近縁な祖先に由来することが示唆されている。すなわち、沖縄とフィリピンそれぞれに生息している個体が、それらの海域間を往来している可能性が示唆されている。しかしこのことは、必ずしも最近の個体の交流を示唆するものではなく、フィリピン近海のジュゴンの移入が現在も続いているのかどうかの検証は今後の課題とされている。

図33をもとに、現在のジュゴンにとって重要な海草藻場として、沖縄本島東海岸中北部及び西海岸北部を、図36に示した。

ザトウクジラ(南西諸島、小笠原諸島・火山列島)

ザトウクジラは、ヒゲクジラ類の一種で、世界の海洋に広く分布し多くの系統群に分かれる。北太平洋にはアジア系とアメリカ系の2つの系統群が存在し、日本近海にはアジア系群が分布している。北太平洋のザトウクジラは夏期高緯度海域に移動し豊富な餌生物を捕食し、冬季は低緯度海域へ繁殖のため南下する。日本では、沖縄—慶良間列島、小笠原諸島—火山列島の水深200以浅海域で繁殖し、アリューシャン列島東部へと索餌回遊する。カムチャツカ半島周辺の海域も回遊先の一部と考えられている(図34、図35)。

一般的な餌生物はオキアミ類、カラフトシシャモ、ニシン、スケトウダラ、イカ類である。

水産庁編「日本の希少な野生水産生物に関するデータブック」(2000年)では、本種を対象とした捕鯨産業は世界的に禁止されているが、無秩序なホエールウォッチングが行われた場合、繁殖に悪影響を与える危険性があること、また定置網によって混獲される可能性が指摘されている。

図34、図35をもとに日本におけるザトウクジラの主な繁殖場を、図36に図示した。

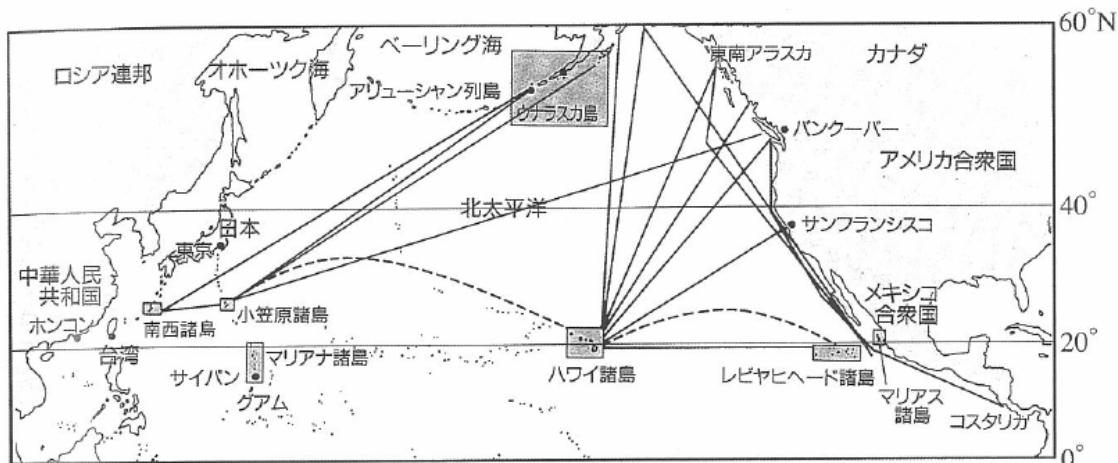


図34 北太平洋のザトウクジラの回遊

出典：内田詮三編「沖縄近海のザトウクジラ 尾びれカタログ」(2007年、(財)海洋博覧会記念公園管理財団沖縄美ら海水族館)

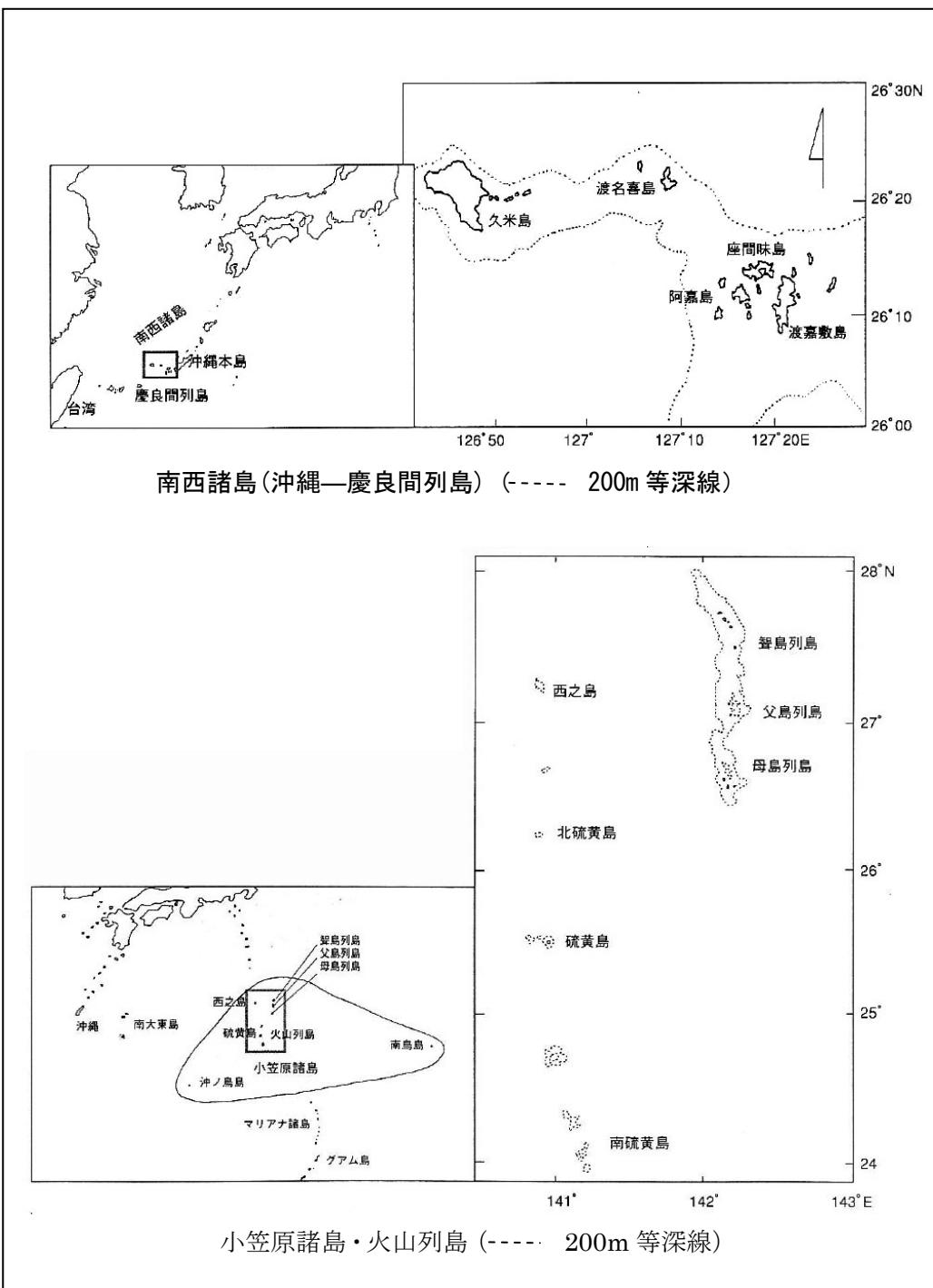


図35 ザトウクジラの日本における主な繁殖場

出典：加藤秀弘監修「事典「クジラの尾ビレ」一小笠原・沖縄ー」(2000年、財団法人 東京都海洋環境保全協会 小笠原海洋センター)

